
特に用はないのだけど

斎藤佑祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特に用はないのだけど

【Nコード】

N4249BA

【作者名】

斎藤佑祐

【あらすじ】

「特に用はないのだけど」というのが、彼が電話をしてきたときの口癖だった。

「特に用はないのだけど」というのが、彼が電話をしてきたときの口癖だった。話は本当に取りとめのないことばかりで、しかも途中で話題が尽きてしまうため、最後はいつも私が話し、彼は聞き役にまわるのだった。

その日も、いつもと同じだった。彼の「特に用はないのだけど」からはじまり、私が話し、彼が聞き役にまわる。しかし、私は違和感を覚えた。彼の相槌があいづち少ないのだ。そのせいで会話に不自然な間ができていた。私は耐えられなくなり彼に尋ねた。

「どうしたの？ 体調でも悪いの？」

しかし彼は黙ったままだった。

「ねえ、大丈夫？」彼はおしゃべりな方ではないが、無口なタイプではない。こんな風に会話がぎこちなくなることはこれまでなかった。もしかして彼に何かをいづらいことがあるのではないかと思っただ。そう思うと私の頭の中にひとつの最悪な想像が浮かんだ。

『別れ話』

彼の仕事の関係で遠距離になって一年半、それは目に見えないものまでも遠い距離にしまったのかもしれない。まだ決まったわけではないのに、彼から別れ話を告げられるのではないかと思うと急に涙が出てきた。我慢しようとしたが駄目だった。確かに私たちはケンカもする、いいことばかりではない、けれども私は彼のことが好きなのだ。

電話越しに私の異変を感じたのか、今度は彼が尋ねてきた。

「どうした？」

私は鼻をすすった。「……何でもない」

「もしかして泣いてるのか？」

「泣いてない」

「そうか……あのさ」私はついにきたと思った。怖かったが彼の一言一句を聞き逃してはいけない思い、電話を耳に強く押し当てた。

「あのさ、俺さ、再来月の四月にそっちに戻る事になったから」

「え？」「それで戻ったら俺と」

ドサッ

予想していたことと全く違う状況に気が抜け、私は電話を落とすてしまい、慌てて拾った。

「んだ。どう？」

「ごめん。電話を落として聞いてなかった。もう一度言って」

「……いや、今度会った時に直接言うわ」

「そう、ならいいけど。それとこっち戻ってくるなら大したことですよ。なのに何で『特に用はないのだけど』って電話してくる訳？」

「えっ、いやあ、それは……」

「それと前から言いたかったんだけど」

「

私は自分が泣いてしまったことを誤魔化すために、彼に曰くろの
不満をぶつけたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4249ba/>

特に用はないのだけど

2012年1月11日10時48分発行